

海外帰国子女の学生経歴とライフコース： 追跡調査に向けて¹⁾

南 保輔

1. はじめに：長期在住海外子女の大学選び
2. 調査の概要
3. 90年入学コーホート
4. 海外子女の言語運用能力
5. 帰国子女の英語力
6. 海外帰国子女の大学選びとキャリア計画
7. 海外帰国子女のライフコース：今後の課題

1. はじめに：長期在住海外子女の大学選び

高山照子と中川隆弘は、アメリカ西海岸の S 市に住んでいる。²⁾ 2001年 8 月に南が話を聞いたときには、2 人は秋から現地の高等学校の最終学年である 12 年生となるところだった。アメリカの大学は 9 月が新学期で、出願は入学する前年の秋から冬にかけて行われる。照子と隆弘の 2 人は、大学出願を間近に控えてその準備を進めていた。

照子は、アメリカの大学で機械工学を専攻することに決めていた。得意な数学と物理の知識を生かすためだ。夏休み中に各大学のホームページを検索し、特に興味がある“aerospace engineering (航空宇宙工学)”を専攻できる大学を候補として選び出していた。SAT の得点は 1400 点代の後半で、マーチングバンドで熱心に活動している。夏休みもマーチングバンドの活動があるということで、多忙な合間を縫って南の調査に協力してくれた。サマージョブという形でも、働いたことはないということだった。³⁾

照子が大学と専攻の志望をかなり絞り込んでいたのにたいして、隆弘は大き

なところで迷っていた。日本とアメリカのどちらの大学に進学するかという選択だ。隆弘の母親である中川夫人は、子どもの日本語教育にとりわけ熱心だった。自身も毎年1回以上日本へ帰国しているし、子どもたちも毎年のように帰国させている。その日本語教育、日本人としての教育の総決算として、大学は日本へと考えてきた。だが、いざ決めるといふ段階になって迷いが出てきた。かなりの日本語力を獲得した隆弘を前にして、わざわざ日本の大学へ通わせる必要があるのだろうかというわけだ。また、日本の大学に行っても帰国子女ばかりとつきあうということになるのであれば、わざわざ日本の大学に行かせる意味もない。隆弘自身は、遺伝子工学に興味があり、アメリカの大学に進学するならこれが1つの候補だと言っていた。だが、詰めて検討した上での結論ではないということだった。

南は、S市にある日本語補習授業校なぎさ学園で1990年4月から翌年3月まで集中的な参与観察調査を実施した。毎週土曜日の授業日に出かけて行って、授業の様子を観察したり教職員に話を聞いたりした。帰国を控えた家族を中心に、母親を対象とするインタビューも行った。その後、91年4月から7月にかけて、帰国後の状況について日本で追跡調査を実施した。家族とのインタビューに加えて、学校を訪問して観察したり教員から話を聞いたりする努力も行った。これらの調査結果を中心に、海外帰国子女の生活経験とアイデンティティについてまとめたものが、南(2000)である。

結果を書物という形で発表するまでに、調査から丸10年という歳月を要した。その間、96年に南はS市を訪問した。なぎさ学園の教員と話したり授業を参観したりしたが、特に焦点を決めて調査活動をするとはしなかった。昨年本を出版して一区切りついたということもあり、「その後」を中心に調査に取り組むことにした。ただ、長期にわたってS市に滞在できるわけでもなく、学会出席の機会にS市を訪問して調査を行うこととした。10年の時間を隔てて、どれだけの調査が可能であるかを見極める予備調査という性格が強いものだった。本論文は予備調査の報告書として、2001年の調査で情報が得られた協力者の現状を簡単に紹介するとともに、追跡調査を今後拡大継続していくにあたっての課題を整理することを目的としている。

2. 調査の概要

2001年になって追跡調査に取りかかったのは、海外帰国子女のその後を知りたいという希望のほかに、倫理問題への関心もあった。調査結果を書物の形で発表するという事は、調査協力者のプライバシーを開示することであり細心の配慮が要求される。2000年春に本を出版すると、南は調査協力者にできるだけこれを送付するように努めた。2001年の調査では、本への感想を尋ねるといふことも重視した。

帰国追跡調査対象15家族のうち、今回調査したのは4家族だった。まず、5月に牧野家を訪問して、牧野氏と夫人、長男の俊弘に話を聞いた。牧野家は4年6ヶ月のS市滞在後、91年1月に帰国した。3人の男児がおり、帰国時はそれぞれ小学校4年生、2年生、1年生だった。2001年5月には、長男俊弘が首都圏私立A大学工学部の2年生、次男和之は私立B大学工学部の1年生、三男雄介は公立高校の3年生だった。滞米中に全身脱毛状態となり、日本帰国後は「いじめ」が心配された俊弘だが、10年を振り返ってもらうと、とくに「いじめ」られたような記憶はないということだった。⁴⁾ エンジニアである牧野氏の影響からか、俊弘も和之もエンジニアになることを考えている。雄介は高校でサッカー部の活動に熱中しているが、大学では同じく工学部を志望するのではないかということだった。

7月には、関西在住の北村夫人に話を聞いた。北村家は1年7ヶ月と滞米期間は短かった。だが、子どもが小さかったことと、北村氏が英語教員であるという事情から英語教育に熱心で、娘2人はかなりの英語力を獲得していた。91年3月の帰国時、長女優子は小学校4年生、次女直子は1年生になるというところだった。2001年7月、優子は関西の私立C大学文学部の2年生になっていた。直子は私立高校の2年生で、将来建築を専攻したいと考えているということだった。

同じく7月に、木下祥子にインタビューを行った。6年10ヶ月の滞米後91年3月に帰国した祥子は、4月から首都圏の公立帰国子女受け入れ中学校の2年生となった。その後、私立D大学付属D高校に帰国子女枠で入学し、学内推薦でD大学経済学部に進学し卒業した。卒業後は、関西にある外資系企業に就職

していた。調査は、祥子が帰省中に行われた。また、祥子の母親の木下夫人とは、9月に別にインタビューを行った。

9月には、東京の私立E大学法学部の3年生となっていた橋本美佐代に話を聞いた。美佐代はS市に4年8ヶ月滞在し、北関東のA市に帰国後の91年4月、小学校6年生となった。公立中学校から公立高校に進学した美佐代は、高校2年生のときに民間の交換留学プログラムで1年間アメリカに滞在した。大学進学にあたってはアメリカの大学も考えたが、結局現在のところに落ち着いたということだった。

以上4家族の7人の「子ども」について情報を集めたほかに、日本でS市からの帰国子女1人に話を聞いた。⁵⁾ 国立F大学医学部を卒業後、都内の病院に勤務して1年目の根岸英理子である。英理子は生後間もなく、両親と共にS市に渡った。高校卒業までS市で暮らし、卒業後帰国して帰国子女枠でF大学医学部に入学した。英理子の母親がなぎさ学園で教員をしていたこともあり、南はいろいろな面で調査支援を受けた。英理子は滞米が長期にわたり、南の前回の調査では対象としなかったタイプである。しかし、「アメリカ滞在経験」の「影響」ということを理解していくためには貴重な事例であり、特に要請して調査協力を得た。表1には、8人の帰国子女の基本属性を示した。

表1 帰国子女一覧

氏名	2001年度	滞米	帰国時 ^{a)}	帰国地 ^{b)}	大学
牧野俊弘	私立A大学工学部2年	4:06	小4	首都圏	—
牧野和之	私立B大学工学部1年	4:06	小2	首都圏	—
牧野雄介	公立高校3年	4:06	小1	首都圏	工学部志望
北村優子	私立C大学文学部2年	1:07	小4	関西圏	—
北村直子	私立高校2年	1:07	小1	関西圏	建築志望
橋本美佐子	私立E大学法学部3年	4:08	小6	北関東	—
木下祥子	外資系企業2年目	6:10	中2	首都圏	私立D大学経済学部
根岸英理子	病院勤務1年目	17+	大1	首都圏	国立F大学医学部

a 帰国時の学年は、牧野3兄弟は1991年1月の帰国時のもの。根岸英理子を除くほかの4人は91年3月末の帰国のため、4月からの学年。英理子が帰国したのは、1994年7月である。

b 帰国地は東京・神奈川・千葉・埼玉を「首都圏」とし、栃木・群馬・茨城を「北関東」としている。

2001年夏の南のアメリカ訪問は、学会参加が1つの目的だったが、合わせて2週間余りS市に滞在できることとなった。そこで、以前の調査に協力してもらった家族のその後を調べることにした。90年のなぎさ学園調査では、南は小学校1年生の1クラスをメインフィールドの1つにしていた。ほかに、小学校3年生と5年生の1クラスずつでも8ミリビデオ撮影を行った。この調査使用承諾を得る目的で、家族にインタビューをしていた。⁶⁾

高山家と中川家は、1991年春にそのお宅にお邪魔して話を聞いた。高山夫人も中川夫人も海外生活は長かったが、その経緯はかなり対照的だった。高山夫人は、日本の高校卒業後渡米した。S市にある大学と大学院修士課程を終え、アメリカに来ていた高山氏と知り合い結婚した。高山氏も高校卒業後渡米していた。親戚がS市で不動産関係の事業をしており、そこで働いていた。中川夫人は、中川氏と結婚して海外生活を始めた。中川氏の父親は貿易業に従事しており、中川氏は日本の大学卒業後それを継ぐ形となった。夫妻は、隆弘が1歳のころにS市へと移住してきた。

2001年の夏は、高山夫人と照子、陽子の3人が、南が滞在していたホテルに出向いてくれた。ある宗教団体主催のユースキャンプに参加した照子と陽子の2人を、空港まで迎えに行きその帰途に寄ってくれた。陽子は照子より2歳年下で、なぎさ学園の高校1年生に在籍していた。

中川夫人と隆弘とのインタビューは、中川家を南が訪問して行われた。親族の看病のために帰国していた中川夫人が日本から戻った直後に、南のS市滞在の最後にインタビューをなんとか設定することができた。隆弘も日本に帰国していたが、母親より一足先にS市に戻ったということだった。

滝村夫人は、2001年度もなぎさ学園で教えていた。90年には小学校1年生を担当していたが、その後このコーホートを小学校3年生と4年生で教えている。2001年度は小学校5年生の担任をしていた。子ども連れでS市を訪問した南のシッターを引き受けてくれた。美弥と恵美という2人の娘がおり、美弥は90年入学コーホートの1つ下の学年にあたる。子どもを引き取りにうかがった際に、滝村夫人と美弥とから話を聞くことができた。

東田正和も美弥と同じ学年だ。母親の東田夫人は90年当時、小学校3年生を担当していた。当時6歳だった正和を連れて、なぎさ学園のオフィスに授業準備に来ていた姿が南の記憶に残っている。その後事情があつてなぎさ学園で教

表2 海外子女一覧

氏名	日本の学年	現地校学年	大学	専攻
高山照子	高3	12年生	米国	航空宇宙工学
中川隆弘	高3	12年生	未定	遺伝子工学
東田正和	高2	12年生	米国	細胞生物学&国際関係
滝村美弥	高2	11年生	日本	社会福祉
高山陽子	高1	10年生	米国	理科室

えるのはやめたが、正和は小学校卒業まで補習校に在籍した。今回、南が滞在するホテルまで母子で出向いてくれた。

これら4人とその妹を海外子女と呼ぶことにする。表2にその基本属性を示した。90年度小学校入学かそれより若く、これから大学進学を迎える。ただ、日本の学齢とアメリカの学齢の関係から、正和は、照子や隆弘と同じく、12年生を迎えるところだった。実は、照子と隆弘は早生まれで、補習校の同級生の大半はすでに大学への進学を決めていた。カリフォルニア大学バークレー校への入学が決まっている子どももあり、照子や隆弘は自分の出願先を考えるときの参考としていた。

家族へのインタビューのほかに、S市滞在中になぎさ学園のオフィスを訪問して、文部科学省派遣教員である校長先生たちから話を聞くことができた。また、なぎさ学園で高校生に国語を教えている西川氏から、照子や隆弘の日本語力などについて話を聞いた。8月末の土曜日には、2学期第1回の授業があり、なぎさ学園の授業風景を久しぶりに観察することもできた。

3. 90年入学コーホート

大規模な追跡縦断調査として、南は2つの方向を考えている。1991年の帰国追跡調査に協力してくれた家族をさらに追跡するというものと、91年には帰国していなかった家族を追跡するというものだ。照子と隆弘の調査は、後者の一環と位置づけることができる。

照子と隆弘の事例を理解するときの比較の方向としては、滞米期間や年齢の違う子どもとの比較と、時代差を見るというものが考えられる。両親の教育

表3 90年入学コーホートの在籍数（文集への作品掲載者数）

	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2
男子	33	30	34	31	27	26	22	21	22	11	4
女子	28	26	19	20	21	29	24	23	22	14	3
合計	61	56	53	51	48	55	46	44	44	25	7

意識や家族が教育に費やすことができる資源、きょうだい構成などの差も考えられるが、これら家族要因は本節ではひとまずおいておこう。⁷⁾たとえば、追跡調査対象者では、雄介が照子たちと同じコーホートである。あるいは、7つ年上にあたる英理子との比較も考えられる。もし隆弘が日本の大学への進学を決めた場合、英理子と同じように、6月に現地の高校を卒業したあと帰国して帰国子女向けの予備校に通い、受験するということになるだろう。

ここで、なぎさ学園における照子たちのコーホート全体について見ておこう。日本人子女の海外生活経験の多様性をうかがうことができる。1990年4月になぎさ学園の小学校1年生に入学したのは、男子34人、女子23人の57人だった。そのうち、滝村夫人が担任する1年1組は男子11人、女子9人の20人だった。補習授業校は在籍児童の出入りが激しい。なぎさ学園では、国語学習の一環として、年度末に文集『なぎさ』を刊行している。これに文章を載せている子どもを中心に調べてみると、高校2年生にあたる2000年度までで延べ131人の子どものが在籍している。⁸⁾小学校1年生から6年生までは、61人、56人、53人、51人、48人、55人となっている。中学校1年生から3年生では、46人、44人、44人が文集に作品を載せている。高校1年で25人、高校2年で7人となっている。

男女別の数値も合わせて表3に示した。この表からは、個別の子どもの在籍歴はうかがうことができない。たとえば、照子は小学校1年生からずっと在籍しており、女子数のうちの「1」は彼女である。隆弘も高校2年の最後に退学してしまっただが、高校1年までの男子数にずっとその位置を占めてきた。逆に、小学校1年生の1月に帰国した雄介は「小1」男子の33人中の「1」を占めるだけである。また、小学校3年生が終わって日本に帰国し、再度5年生のときに再渡米し中学校1年生まで滞在したような女子もいる。

表3を見ていて気づくのは、在籍数は小学校1年生からずっと男子のほうが

表4 90年入学コーホートの編入者数

	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1
男子	4	11	4	5	1	6	0	3	0
女子	3	2	1	3	8	1	1	1	2
合計	7	13	5	8	9	7	1	4	2

多かったのに、小学校6年生になってそれが逆転していることだ。これは、小学校6年生のときに編入学してきた9人中8人までが女子であることを反映している。この現象にはさまざまな要因が関係しているだろうが、1つ考えられるのは親の意識の違いである。小学校6年生の子どもをかかえる父親が海外駐在となったとき、女子であれば一緒に連れていこうということになるだろう。男子の場合は、そうする家族は少ないだろう。将来の高校受験や大学受験を考えて、連れていかないということになる。そうなると、母親も日本に残り、父親単身での赴任となるだろう。海外への単身赴任は、派遣する企業の側としては歓迎できるものではない。だが、子どもの教育という理由は、親の介護とならんで受け入れられやすいようだ。もちろん、1対8という男女差がこれだけで生じたというつもりはない。だが、子どもの年齢が大きくなればなるほど、帯同しての海外駐在は敬遠されるものとなり、それは女子よりも男子の場合にとりわけ大きいという可能性を考えることができる。

しかし、年度ごとの編入者数を男女別に集計してみると、表4のようになった。中学校1年生の編入者を見ると、男子6人と女子1人となっている。上で述べた、親の意識が子どもの性別で差があるという仮説とは反する結果だ。さらに詳しい調査を必要とするところだ。

日本での大学進学への影響ということであれば、ポジティブなものにも言及しておく必要がある。それは、帰国子女枠の存在だ。海外の高等学校課程を修了した生徒は、帰国子女選抜手続きで、大学に入学することができる。これの活用を見越して、高学年の子どもを帯同するかどうかを決めるということがあるだろう。実際のところ、なぎさ学園の教職員の話によれば、高学年になった子どもを海外に連れてくるという事例が近年増加しつつある。そのような子どもの中には、以前に海外で暮らしたことがある子どもも少なからずいる。だが、初めて海外生活を経験する子どもも多いということだった。

この現象に関連して、アメリカの大学は入学するのはそれほど難しくないと、**「安易な道」**を選ぶ家族がいるという厳しい指摘がなぎさ学園の教員から聞かれた。日本にいれば大学入試のための受験勉強が必要となるが、アメリカならば2年制のコミュニティカレッジに無試験で入学できる。その後、4年制大学に編入する可能性は広く開かれている。英語力の獲得に時間を要することを考えれば、高学年になってアメリカにやって来た子どもにはこれが現実的な戦略でもあるのだ。

4. 海外子女の言語運用能力

「私は日本人だ」、「僕はアメリカ人だ」という意識は、社会文化的アイデンティティの中核をなすものの1つだと南は考えている（南 1998）。この社会文化的アイデンティティと密接に関連しているのが、言語運用能力だろう。本節と次節では、海外帰国子女の言語運用能力を、海外子女の日本語力と帰国子女の英語力に焦点をあてて見ていく。当然のことながら、海外子女の英語力と帰国子女の日本語力についても言及することになる。

まず、90年入学組の照子と隆弘とを比較してみよう。2人の両親は日本生まれであり、日本で少なくとも高校を卒業してから海外にやってきている。2人とも、数週間単位の「一時帰国」を別にすると、日本に居住したことはない。2人を比べると、日本語で詩作もするという隆弘のほうが日本語使用の機会は多いようだ。照子の日本語力は、敬語も自在に使える隆弘に比べると見劣りがした。インタビューにおける日本語の問いかけは十分に理解しているようだが、その回答は短く、ほとんど必要最低限のものという印象だった。なぎさ学園の教員のあいだでも、照子は「無口」で有名だった。たいして、隆弘の日本語力は日本に住んだことがない海外子女にしてはかなりのものだと感じられていた。

「無口」というか口数が少ないことと言語運用能力とが直接結びつくとは限らない。日本生まれの日本人のあいだにも「おしゃべり」な人と「無口」な人とがいる。二言語を話す海外子女の場合、日本語会話と英語会話の双方を考慮する必要がある。また、南とのインタビューという文脈では「無口」だったということもありうる。⁹⁾ この点で興味深いエピソードを、滝村夫人から聞いた。滝村夫人は、美弥の日本語力を不満に思っていた。南の3歳近い男児が、わり

と語彙豊富に日本語を話すのと美弥とを比べたりもしていた。美弥の日本語について母子で話したときのことだが、美弥は、現地校の教室で自分はおしゃべりで有名だと滝村夫人に強く主張したという。日本語では言葉を選びながら話す美弥だが、英語ではそんな必要はないというのだ。

海外子女の日本語力もさることながら、その英語運用能力も興味深い調査項目だ。表2に見られるように、アメリカ生まれの日本人子女は大学で理数系の学問を専攻する傾向がある。これは、日本の教育カリキュラムのおかげで数学が得意になるという要因に加えて、アメリカ生まれの両親を持つアメリカ人に英語力では及ばないという事情もあるのではないかと南は考えている。とくに、アメリカの大学に進んだ日本人子女で、ロースクール（法学校）に進んで弁護士になったという話をほとんど聞いたことがない。優秀で成績が良い子どもは、医師を志望することが多いようだ。

正和とのインタビューでは、英語力についてもかなり詳しく聞いた。正和は、なぎさ学園が遠くなったということもあり、補習校には小学校6年生までしか行っていない。¹⁰⁾ だが、現地校12年生を迎えるこの時点で、日本語会話は達者であり、南とのインタビューでも大学進学戦略について詳しく説明してくれた。

正和は、現地校のクラスメートと比較しても、英語は「こっちのほうができるくらいだ」と言う。母親である東田夫人は、スペリングビーで好成績を挙げているのに、語彙数ではクラスメートに劣っていると正和が小学生のころは感じていた。家庭で両親が英語を話さないことのハンディがあるのだろうと考えていた。しかし、「いま」は「普通どおり」だと言う。正和の自己評価に同意しているようだった。

照子と隆弘、美弥、正和の4人は、小学校1年生から補習校に通っている。正和が小学校6年生まで、美弥が中学校3年生まで、隆弘が高校2年生の途中まで、照子が高校3年生までと、在籍期間にはかなり開きがある。しかし、小学校6年生でなぎさ学園をやめた正和は、中学校になっても日本に毎年帰国して、短期間ながら塾の夏期講習に通ったりしている。南が話した印象では、隆弘と正和の2人が流ちょうに日本語を話したのにたいし、照子と美弥の2人が言葉を選びながら話すというかんじだった。

日本への帰国について言うと、照子と隆弘も、正和と同じように毎年帰国している。照子は、小学校の間だけではなく、中学校も3年間体験入学をした。

美弥については詳しいことはわからないが、それほど頻繁に帰国していない。小学校5年生と6年生のときには帰国したが、体験入学はしていないようだ。

一時帰国と体験入学の頻度は、家族の教育意識と資源とがよく反映されているものだと考えられる。もちろん、平素の日本語学習において子どもとどのように接するかも大きい。学年が上がるにつれて学習内容が難しくなり、母親の助けが欠かせないものとなる。そのときに、一緒に教科書を読んでやるといったことをするかどうかだ。あるいは、なぎさ学園への送迎も容易なことではない。車で1時間かかるところに住んでいる場合、朝送り届けて引き返し、夕方また迎えに行くとなると、母親は毎週土曜日は4時間も運転することになってしまう。

家族以外の要因で重要なのが、友人関係だ。隆弘が高度の日本語能力を獲得しているのは、日本人の親しい友人ネットワークを作り上げたということと密接に関係しているようだ。隆弘の話によると、補習校に入学したときに親しくなった友人の大半は中学校になると、日本に帰国するか退学するかしてしまった。しかし、そのころに日本から編入してきた子どもと仲良くなり、それがずっと続いているという。ここ数年は、音楽のバンドを組んで、その練習に頻繁に集まっている。日本語をまったく話さない現地の友人で、それほど親しくしている人はいないということだった。

照子と美弥、正和の3人には、隆弘ほど親密な日本人の友達はほとんどいない。照子がなぎさ学園で一番仲良くしていた友達は、高校に入ると帰国してしまった。美弥がずっと仲良くしているのは、生まれたときからアメリカにいる日本人だ。2人で互いに支え合って、ときにはくじけそうになる日本語学習に取り組んでいる。正和には、親しくしている日本人はいない。現地校では、白人の勉強好きな生徒と話すことが多いということだ。¹¹⁾

以上、両親の教育意識や体験入学の頻度、日本人の友人の有無を簡単に見てきた。これらが、海外子女の言語運用能力と深く結びついていることは間違いない。ただ、その結びつきの様態や強度については、さらに詳しいデータを集めて分析していく必要がある。

5. 帰国子女の英語力

言語運用能力を問題にするということは、日常よくなされる。「あの人は、英語がペラペラだ」という表現は、ほめ言葉として日本人のあいだである種の羨望の念とともに表出されることが多い。だが、教育や選抜を目的とした客観評価を別とすれば、これを比較しようとする試みはただちに困難に出会うことになる。たとえば、アメリカで英語運用能力を測定するものとしては、非母語話者を対象とした TOEFL や、大学出願時に受験する SAT の言語テストなどがある。また、現地校での英語科目の成績や ESL に在籍しているかどうかといったことも、英語力に関するある種の指標となろう。

対照的に、日本では、日本語の運用能力を測定するものは、日本語能力試験とビジネス日本語能力試験、実用日本語検定などがある。これらは、日本語が母語ではない人びとを対象としており、TOEFL や SAT ほど一般に広く受験されてはいない。¹²⁾ 大学入試センター試験の現代国語の得点は、ちょっと使えない。言語能力ではなく、難解な現代文の読解が問われているからだ。高校の現代国語科目の成績も同じ理由から、不適當だろう。また、英語に関しても同じことが言える。英語を流ちょうに話す帰国子女が、日本生まれの中学生よりも学校で英語の成績が良くないというのはよく聞く話だ。

S 市に5年近く滞在して小学校4年生の3学期に帰国した俊弘は、今でも英語の聞き取りには苦勞しない。友達とギターのバンドを組んでいるが、英語曲の歌詞を聞き取ることができる。日本育ちの友達はメロディーで曲の好き嫌いを決めるが、俊弘は歌詞が理解できるために、友達と曲の好みが合わないことがあると言っていた。話す方は、口から英語がスラスラと出てくることはなくなった。頭の中で英語を日本語に「翻訳」しようとしているのに気づいて、自分でもショックを覚えたことがある。帰国して5ヶ月後の91年6月に南が牧野家を訪問して話を聞いたときには、俊弘と和之は週に2回、アメリカ人に英語を習いに行っていた。それもほどなくやめてしまい、その後は学校の外で特に英語を習ったことはない。

現在大学3年生の美佐代は、ずっと英会話学校に通っている。高校時代には1年間、アメリカの高校に留学している。大学は、法学部と文学部日本史学科

とを受験した。文科系の学部の場合、英語の得意な学生は入学試験において有利となることが多い。難関私立大学では、難解な英文を大量に読解する問題が出題されることがある。文法知識は弱いが語彙力や読解力は高い帰国子女にとっては、能力をフルに発揮できるものだ。ただ、日本語力では美佐代は問題を抱えている。難解な法律用語に苦勞しており、3年生なのに取得済みの単位が少なく、4年間で卒業できるかどうか危ぶまれるということだった。

美佐代の直面している問題が日本語のみの問題であるかどうかは難しいところだ。しかし、調査協力者の帰国子女のあいだに、英語を専門としている者がいないことは興味深い。俊弘に、将来の仕事に英語を活かすということを考えなかったのかと聞いたところ、英語を自分の専門にするのではなく、エンジニアという別の専門があって、英語も使えるというのが理想だと言っていた。美佐代にしても、英語や英文学を専攻するということは考えなかったようだ。

祥子は、S市で家庭教師として教わった日本人女性を尊敬していて、この人のように英語教師になりたいと考えたこともあった。だが、日本の学校で英語を教えるためには、英文法の知識が必要となる。祥子は、これを嫌って、民間企業に就職する途を選んだ。外資系企業であり、上司や海外と英語でやりとりすることが多い。祥子は、自分の仕事に満足しており充実した毎日を送っているようだった。

帰国子女にとって、日本語で問題となるのは語彙や文化的な知識であることが多い。1歳からS市で暮らして高校卒業後に帰国した英理子だが、日本語の語彙を増強するために四字熟語を特に勉強したという。祥子も、日本生まれであれば「当然」知っているであろうと思われる事柄を知らないことがやりとりのなかで判明することがあり、「これだから、帰国子女は」とあきれられることがあると話してくれた。¹³⁾

帰国子女が英語を専門としないということについては、周囲の人間の考えも関係している。俊弘の父親の牧野氏は、91年の調査時に、子どもに英語は伸ばしてほしいが、それだけではなく、自分の専門分野があってそれに英語が生かせるというふうになって欲しいと語っていた。祥子の母親から聞いた話だが、祥子の通っていた高校の教師は、留学するなら英語を勉強しに行くのではなく、英語でなにかを勉強しに行くようにと祥子にアドバイスしたということだった。

6. 海外帰国子女の大学選びとキャリア計画

海外帰国子女の言語運用能力がどんなものであり、これを将来のキャリアにどのように活かしていこうとしているか。大学や専攻の選択、就職先の選択とどう関係しているかを整理しておこう。

アメリカの大学で航空宇宙工学専攻を希望している照子は、日本語力を将来活かそうとは特に考えていない。日米どちらの大学かで迷っている隆弘は、アメリカの大学に行くなら遺伝子工学を専攻しようと考えている。その場合、日本語力を活かすということは特に考えていない。日本語力の活用を一番はつきりと視野に入れているのは正和だ。彼は、大学で細胞生物学を専攻し、大学院で国際関係を学びたいと考えている。そして、細胞生物学の分野で開発された新技術を、日本に移転するような仕事をしたいということだ。

正和は、生体臨床医学の技術者であった父親を小学生のときに亡くしている。母親の東田夫人は父親の同僚とその後親しくしており、正和の生物学への関心はこの男性から影響を受けた結果だ。しかし、自分は研究室に閉じこもる生活は合わないと正和は感じている。人と交渉するような仕事をしたい。それで、日本語力を活用する将来像を描き出したというわけだ。航空会社の客室乗務員をしている母親の影響も大きい。母子は、ヨーロッパやアジアを中心に多くの旅行をしている。国際関係への関心は、海外旅行経験が大きく関係している。

東田夫人は、夫を亡くしたときの経験から、正和には医師と弁護士にはなつて欲しくないと考えていた。どちらも、顧客が「ハッピーな人ではない」からだ。夫の闘病経験などを通じて接した医師や弁護士を見て、そのように強く感じた。アメリカで母子2人で生きてきた正和にとって、母親の意向は大きなものだ。正和が流ちょうな日本語を話すことには、母子が日本語で会話していることも関係しているだろう。

美弥は、隆弘よりもさらに強く日本の大学進学を考えている。その理由は、「日本人と結婚するため」だ。専攻は、福祉関係を考えている。両親である滝村夫妻の渡米事情を考えると、これはやや意外なことだ。滝村夫妻がS市にやってきたのは、企業からの派遣ではなく自発的な意思によるものだった。日本の大学を卒業後ある企業に勤めていた滝村氏は、5年でやめた。大学院に行

くことも考えたが、それならいっそのことと S 市にやってきた。そこで修士課程を修了して、日系企業に勤めだした。1983年のことである。滝村夫人は、子どもの出産と育児による中断期間を除いて、なぎさ学園で小学生を教えている。気候も生活環境も申し分のない S 市での生活を満喫しているように見える。

滝村夫人にその理由をたずねたところ、アメリカの大学に進学すると美弥はベトナム系などの新移民の子どもと結婚することになるからだという答えが返ってきた。高校生になった美弥は、ボーイフレンドとデートするようになったが、その相手が必ずといっていいように東南アジアからの新移民なのだ。なぎさ学園の同級生である日本人は、女性にたいしてそれほどやさしくしないと聞いたこともあるのだろう。日本で大学に行けば、日本語力も磨かれるだろうし、結婚相手も日本人になるだろうと考えた。小さなときから専業主婦願望があった美弥にとっては、両親の意向が魅力ある選択肢となっているということだろう。

帰国子女の牧野三兄弟は、父親の影響からか全員が工学部専攻だった。北村姉妹の姉の優子は日本史専攻で、妹の直子が建築志望である。美佐代は、法学と日本史と迷った末に、法学専攻に決めている。祥子は、かなり詳しく学校や専攻の選択について話してくれた。滞米が7年近く、帰国後中学校2年生になった祥子は、高校入学に際して帰国子女選抜枠で出願する資格があった。私立 D 大学の付属 D 高校と別の私立 G 高校とに、祥子は帰国子女枠で出願し合格した。G 高校は帰国子女受け入れの歴史が古く、帰国する前には祥子の第1志望の学校だった。しかし、2つの高校に合格してみると、大学進学の際に学内推薦枠が広く、選択できる専攻も多い D 高校のほうに魅力を感じた。父親の木下氏が D 大学の卒業生であるということも関係があったのかもしれない。

大学の専攻選びでは、法律学と政治学、経済学、商学、文学からの選択となった。D 大学には理科系の学部もあるが、高校で理数系の科目を多く選択しなければならない。アメリカ時代には数学が得意科目の1つだったが、帰国後の祥子は数学嫌いとなっていた。そのため、理科系の専攻は高校3年生になるときに候補から外れた。学内推薦では、高校の成績順で希望が通る。祥子の話によると、商学部と文学部とは合格最低点が低く、「あまりお勉強ができない」

生徒が進学するところという共通認識が生徒のあいだにあった。祥子は、これにも影響をされた。それで、法学部と経済学部のどちらかと絞り込んで、経済学部を選択したということだった。

祥子は、一生仕事を続けていくことは考えていない。それで、就職活動では、入社して「生き生きと若いあいだからやらせてもらえる場所」であることを条件とした。女性である祥子にとっては、男女平等も重要な要因だった。「なるべくなら英語を使える仕事」であり、「自分のした仕事の結果が顕著に見えるところ」という希望もあった。逆に、これらの条件が合えば、業種というかジャンルには特にこだわりはなかった。就職活動の初期に参加した A 社の説明会でこれらの希望が充足される可能性が高いことを感じて、応募し内定した。入社2年目の現在、夜遅くまで「安い給料でこき使われている」というが、仕事には満足しているようだった。

英理子は、高校時代は物理が好きで、大学では物理を専攻しようと考えていた。英理子が日本の大学に進学することに決めたのは、S市にいた高校12年生のときだった。大学への出願準備のために受験したSATが高得点で、日本の大学の帰国子女枠に合格できると思ったからだ。英理子は、日本で暮らしてみたいという憧れをずっと持っていた。これは、日本で生活した経験のない海外日本人子女のほとんどが、強弱はあれ一度は持つ夢だと言う。その夢が実現可能なものとなり、英理子は日本の大学に挑戦することにした。アメリカの大学には、「いつでも行ける」という思いもあった。日本の大学は18歳の時期にしか入ることができないが、アメリカではどんな年齢になっても、やる気と経済事情が許せばいつでも学生となることができるからだ。

英理子は12年生を修了して7月に日本に帰国した。東京で帰国子女受験向けの予備校に通ったが、そこで英理子は、自分が高校時代に学んで興味を持った物理が、物理学全体の一部にすぎないことを知る。物理学のほかの領域に興味を持つことができなかつた英理子は、以前から興味があった医学を志望することにした。秋の私立D大学医学部の帰国子女入試に合格した英理子は、翌春国立最難関のF大学医学部にも合格する。F大学に進学した英理子はスポーツ医療を志し、整形外科を専門とする。医師国家試験に合格した英理子は、卒業後都内の病院に勤務している。

7. 海外帰国子女のライフコース：今後の課題

ここで興味深い問いは、隆弘や美弥は日米どちらの大学に進学するのがいいのだろうかというものだ。美弥の場合、語学力や人間関係などを重視して日本の大学を志望しているわけだが、ここでは、職業に直結する知識や意欲に重点をおいて考えてみたい。将来、社会人として活躍する準備として、どちらの大学がよりよいものを提供するのだろうか。当然のことながら、日本とアメリカどちらの社会で、どんな企業に勤めてどんな仕事をするのかという点が大きく関係するだろう。正和の希望しているように、アメリカ企業に属して日本との交渉にあたるという場合もあるだろうし、祥子のように、アメリカ企業の日本法人に勤務するということも考えられる。

英理子は、「歯に衣着せずに」ものを言う傾向がある。「自己主張」とも呼ぶことができるこの性向は、アメリカ社会において奨励されるものだ。だが、日本社会では問題となることが多い。女性が自己主張するということは、特に敬遠される。英理子の両親も、英理子が日本社会で生活していくにあたってこの点を心配している。医師という専門職についたことで、自己主張が強いことが弊害となる可能性は比較的小さいとも予想されるが、今後とも関心が持たれる点だ。

海外帰国子女の大学進学が話題となったときにしばしば言及されるのが、帰国子女枠の存在だ。帰国子女は大学入試で「有利だ」と言われることが多いが、果たしてこれが「本当」かどうかは、教育機関の人材配分機能を考えるときに興味深い。帰国子女入試の試験問題の内容が、国内生向けの一般入学試験の内容よりも簡単なものかどうか、出願者に対して合格者の占める比率が高いとか、有名大学合格者の比率が帰国子女のあいだで高いだとかいう「事実」は、帰国子女有利説の裏付けとなっている。だが、もっとも直接的なものに、「あの子は、日本にずっといたら、X大学には入れなかっただろうに。帰国子女枠だから入れたんだよね」という、補習校教員の思いがある。

最難関と言われる国立F大学医学部に入学した英理子を例に取ろう。S市に行くことがなく、日本で育っていれば、英理子は同じようにF大学医学部に入れただろうか。このような問いを立てることは、英理子がS市で獲得し

たさまざまな要素を無視することになる。母語話者としての英語力はもちろん、高度なフランス語力や積極性などだ。F 大学医学部に入学した一般生のなかには、小学校3年生のころから予備校に通い、中高一貫教育の有名私立学校に進学し、「受験戦士」と言われるような生活を続けた末に入学してくる者も少なくない。英理子自身、学生時代にアルバイトで中学生に英語を教えていたとき、夜の9時まで塾で学習するという姿を見て、自身の中学や高校時代とはかけ離れたものを感じている。「日本の教育はどこかおかしい」というわけだ。それほどまでの「勉強」が受験戦争を勝ち抜くために必要であり、帰国子女はそういう苦勞をしていないという点で、帰国子女が優遇されているという見解があるのだ。¹⁴⁾

もし、帰国子女が、長くつらい受験勉強をくぐり抜けてきた国内生と同じように大学教育を受けて卒業し、同じように社会で活躍することができるのであれば、いわゆる受験「勉強」はなんだっただろうか、ということになるのではないだろうか。¹⁵⁾ 英理子と祥子は、大学でも社会人になってからも、知識や学習面で大きな問題はないようだった。ただ、美佐代はやや苦戦している。大学や社会にでてから活躍するための準備としてどうなのかという問いは、これからの追跡調査で1つの柱とすべきものだ。

日米の大学への入りやすさも、今後の調査における1つのポイントだ。現在、日本では「30大学」構想というものが進められている。その専攻分野で日本の大学の上位30にあたる学部を選んで、そこに政府からの研究補助金を重点的に配分しようというものだ。大学間の競争が激しいアメリカでは、大学のランク付けの歴史はずっと古い。ある分野のランクで上位に入っているかどうかというようなことは、大学の入学案内でも強調されている。たとえば、カリフォルニア州では、州立の大学にカリフォルニア大学とカリフォルニア州立大学とがある。前者は9つのキャンパスがあり、それぞれ独立した運営組織も持っている。大学院博士課程も備えて、リサーチ重視の大学である。たいして、州立大学も州内にいくつものキャンパスを持つが、大学院は修士課程までしかなく、学生の教育に重点が置かれている。教員の授業負担にも差があり、研究に多くの時間を割くことができるカリフォルニア大学と、教育負担の大きい州立大学という対照がある。

カリフォルニア大学の9つのキャンパスや専攻ごとにバラツキはあるものの、

パークレー校などではほぼすべての専攻が全米でトップ20にランクされている。カリフォルニア大学は、カリフォルニア州の高校3年生の上位12.5パーセントが入れるような収容能力を持つということを、1つの原則としている。大学進学率を50パーセントとすれば、ある世代の上位25パーセントということになる。

日本語補習校なごさ学園在籍者でアメリカの大学に進学する生徒は、かなりの割合がカリフォルニア大学か、同じレベルのトップランクの大学に入学しているようだ。日本で上位4分の1の成績を取る高校生が進学している大学はどこかということや、そこに入学しているのはどのような生徒経歴を経てきた子どもかということは、興味深い点だ。もちろん、入学することと卒業することの意味や困難さに日米の大学では大きな違いがあることには留意する必要があるだろう。アメリカの大学は、入りやすいが卒業がむずかしい。日本の大学は、入りにくい卒業するのはやさしいとよく言われるからだ。

社会学で職業上の地位変化を示す概念として、「キャリア」がある(宝月1990:180)。これを学生時代にまで拡張することで、海外帰国子女が日本社会で占める位置の変遷を描き出せるのではないだろうか。縦断的追跡調査をすることで、経歴を構成していく意思決定を詳細に調べるとともに、これが蓄積してどのような軌跡・ライフコースを描いていくのかを理解することができる。社会階層は、個人の経歴やライフコースの集積であり、教育機関の選別機能についての洞察も、このような調査から明らかになるものと考えられるのだ。

注

- 1) 本論文の元となった調査の実施には、2001年度成城大学特別研究費の助成を受けた。また、本稿執筆に際して、京都大学の宝月誠先生や北海道大学の石黒広昭氏から貴重なコメントをいただいた。記して謝意を表したい。謝意ということ言えば、調査協力者家族やなごさ学園の教職員の方を忘れるわけにはいかない。その生活を開示して下さる協力者の存在があつてこそ、本研究は可能なものとなっている。なお、敬称や待遇表現は論文中では省略している。
- 2) 「S市」という表現は、行政単位としての1つの「市」だけではなく、その周辺の自治体も含んでいる。ここでは、日本語補習授業校なごさ学園に子どもを通わせている家族の居住地を指すものとして使用している。なお、本論文中では補習校名や協力者名は仮名にしてある。協力者の年齢などの情報は、特にことわりがないかぎり2001年夏の時点のものである。

- 3) 照子は、典型的な「ジョックス」と言えるのではないかと思われる (Eckert 1989)。エッカートによると、ジョックスとは、「中流階級で大学進学を予定しており、学校代表チームでスポーツをし、学校活動に参加し、成績は悪くない。学校とは、協力的な関係を築いている」高校生を指す (1989:3)。
- 4) なにがはじめであるかを客観的に特定することはむずかしい。受け止める側のいわゆる主観的要因が大きいためだ。インタビューにおける自己報告に大きく依存する本研究の場合、調査協力者による認定とは独立にはじめを取り扱うことはほぼ不可能である。「はじめ」と引用符を付しているのは、そのような考えの反映である。
- 5) すでに成人している協力者もあり、「子ども」という用語はどうかとも思う。だが、海外帰国経験をしたのは「家族」であり、その母親や父親の立場からは「子ども」である。ここでは、「子女」とともにそのような意味で使用している。
- 本稿では、2001年夏時点ですでに帰国している子どもを「帰国子女」、アメリカにいる子どもを「海外子女」としている。両者を合わせて、「海外帰国子女」と呼んでいる。
- 6) これらのビデオ録画とインタビュー記録は、その一部を分析してまとめたもの (南 1995)、大部分は分析されないままである。調査データの選択的利用は不可避なことではあるが、貴重な時間を割いてくれた協力者のことを思うと心苦しいかぎりだ。これは、南を追跡調査へと駆り立てている要因の1つでもある。
- 7) 帰国することがはっきり決まっているか、それとも、永住予定であるかは、家族が子どもの教育、とりわけ日本語教育をどうするかに関して重要な影響力を持っている。また、そのために費やすことができる資源にも家族差はある。毎年現地校の夏休みに一時帰国して「体験入学」するとなると、経済的にも時間的にも犠牲は小さくない。なお、ここで「きょうだい」と表記したのは、「兄弟」とすると姉妹が軽視されているかのような印象を与えるからだ。「兄弟姉妹」とすることも考えられるが、本稿ではこの意味で「きょうだい」と表記する。
- たとえば、高山夫人は、照子と陽子では乳幼児期の言語環境が大きく異なると言う。どちらも S 市生まれだが、長子の照子のときは母親は日本語で話しかけた。しかし、陽子のときは、照子が外で英語を話すようになっていたこともあり、「最初から英語」だったと言う。このために、陽子の日本語力は照子より弱いと高山夫人は考えている。
- 8) 1学期に退学した児童生徒の作品は普通掲載されない。もし、文集の原稿締め切り後に編入して翌年度の1学期に退学した子どもがいるとすれば、その子どもの作品はおそらく含まれないことになる。また、一度退学して復学したと思われる例が3例あったが、これは「延べ数」とはいえ重複集計はしていない。高校3年生のときの文集は、調査時点ではまだ完成していない。しかし、なぎさ学園の高校3年生

課程は4月から7月までの1学期のみであり、高校3年生から新たに編入学してくる生徒はいない。

この集計の際に、文集掲載作品にも目を通した。絵日記に始まって、作文や感想文、創作物語や詩までであった。アメリカに来たときの印象や日本に一時帰国したときの体験談などがあり、海外子女の12年の経験がうかがえる興味深いものであった。

- 9) なぎさ学園の教師も、照子は「無口」だと見ていることは先にも述べた。いずれにしても、相互作用を社会生活の根本と考える南の立場からすれば、「無口」というような、人の特徴を文脈や状況を越えてカテゴリー化するような記述には、注意が必要だ。
- 10) なぎさ学園は、1996年6月まで南北に長いS市圏の中央部にある現地の学校の校舎を借用していた。それが、同年7月からS市圏の最南端の学校へと移動した。北部地区居住の家族の子どもで、これを機に退学した子どもは少なくない。
- 11) 日本語力に関して、日本に一時帰国したときの友人関係が重要ではないかという示唆を石黒氏からいただいた。日本語を話して、それがおかしいとからかわれたりすれば、日本語への学習意欲もなくなってしまうだろうというわけだ。日本における外国籍児童の様子を観察調査された経験を踏まえてのことだ(石黒 1998)。残念ながら、南には一時帰国中の出来事について、高山夫人や照子本人の話以外の情報はない。

照子や隆弘のコーホートへと調査協力者を拡大していくことの利点の1つは、同級生からの視点で見た情報を収集できることだ。たとえば、照子に、隆弘はどんな友達と遊んでいたかと尋ねることが考えられる。もちろん、調査協力者の個人情報相互に開示することにつながる面もあり、プライバシーへの配慮が必要となる。

- 12) たとえば、日本語能力試験を実施している財団法人日本国際教育協会のホームページで調べたところ(http://www.aiej.or.jp/ks/ksj_top.html)、2000年度試験の国内と国外の受験者数は、40,786人と160,235人で、合計201,021人だった。これにたいして、1998-99年度のSATの受験者は220万人(<http://www.pbs.org/wgbh/pages/frontline/shows/sats/test/facts.html>)、TOEFLの受験者は、合計61万人あまりであった(<ftp://ftp.ets.org/pub/toefl/678020.pdf>)。
- 13) ある人がどのような知識を持っていると他者が想定しているかという問題は、相互作用を理解する上で根本的な問題だと思われる。祥子のことを「これだから、帰国子女は」と言ってあきれられる日本人が持っている期待とはどのようなものだろうか。「普通の」日本人に対するものである場合もあるだろうし、D大学のような有名大学の学生あるいは卒業生だから知っているはずだという知識の場合もあるだろう。たとえば、日本の中学生が「利根川」や「水戸黄門」を知らないで、「りこんがわ」や「きいろもん」などと授業中に読みだりすれば、「ふざけている」と教師に思わ

れることになる。あるいは、英語の成績が良い中学生は、国語や社会の成績も悪くないという期待があり、これに合わない帰国子女が苦勞したという話もある。他の例も含めて、南 (2000: 216-224) を参照のこと。

- 14) もちろん、帰国子女が海外で苦勞していないわけではない。祥子は、英語力が母語話者に及ばなかったころは、学校の宿題に夜遅くまで取り組んだ。逆に、アメリカ生活の長い海外帰国子女は、補習授業校の宿題のために、金曜日の夜遅くまで親子で格闘するということがあったりする。
- 15) たとえば、読み書きと文法重視の英語教育は、多くの日本人にとって、選別と英語嫌いをつくること以外にどんな意義があるのだろうかという疑問を提起することができる。大学入試の現代国語もそうだ。大学教育を受ける準備ができていのかどうかを見極めるものではなく、合格者を決定するという「選別」の働きしかしていないのではないだろうか。

文 献

- Eckert, P. 1989. *Jocks and burnouts: Social categories and identity in the high school*. Teachers College Press.
- 宝月 誠. 1990. 逸脱者のキャリア分析: 『ジャック・ローラー』の解釈の試み. 『逸脱論の研究』恒星社厚生閣. 178-223.
- 石黒 広昭. 1998. 異文化コミュニティへの参加過程に見られる談話特性: 多文化・単言語状況における教師と子どもの相互行為に対する談話分析. 科学研究費助成金研究成果報告書.
- 南 保輔. 1995. 海外在住日本人母親のコミュニケーション行動. 『コミュニケーション紀要』10: 101-152.
- . 1998. 「日本人」という公的社会的アイデンティティ: 帰国子女の「日本人」意識を考えるために. 『成城芸芸』161: 160-148.
- . 2000. 『海外帰国子女のアイデンティティ: 生活経験と通文化的人間形成』東信堂.

Student Careers of Japanese Returnee and Overseas Children

MINAMI Yasusuke (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

ABSTRACT

What kind of student careers are Japanese returnee children leading? Is their command of English acquired during their stays in the United States consequential, and if so, how and to what extent? From an ethnographic study of eight returnees in Japan and four Japanese children staying in the U.S., I have found that those who returned to Japan at older ages applied for the special quotas and were accepted by prestige universities. No returnee has decided to major in English or to become a language specialist such as an interpreter. Two of the Japanese children in the States were considering attending a Japanese college. They want to develop Japanese identity by going to universities in Japan. In conclusion, several research questions for a longitudinal study are raised.

KEY WORDS: returnee, student career, life course